

農山漁村等地域の情報集積を活用した持続可能な農山漁村等地域育成への貢献

2. 地域活性化への取組み

(1) 様々な担い手支援策による生乳生産量増加への取組み～生乳生産量 90,000 t にむけて～

JA北オホーツク（北海道）

新規	継続
	○
	(平成 27 年 2 月)

1 動機 (経緯)	JA北オホーツクでは組合員のほとんどが酪農経営であるが、生産戸数の減少・労働力不足が影響して、生乳生産量は平成 24 年をピークに減少しています。 平成 27 年度から 5 ヶ年の中期計画において、生乳生産量 90,000 t を目標とし(26 年度実績 86,612 t)、JA北オホーツク独自で行政(雄武町、興部町)とも連携しながら様々な担い手支援策を打ち出し、労働力の確保・生乳生産の増大に向けて取り組んでいます。
2 概要	1. 農業体験実習生受入制度 将来の新規就農者や牧場従業員となりうる人々を受入するスキームを町と連携して構築しています。 実習生受入は町の農業担い手育成センターが実施主体となり、実習期間によって手当を支給しています。 JAで安価な家賃にて宿泊研修施設を用意しています。女性専用の宿泊施設も有しており、女性単独でも受入しやすい環境を整えています。 2. 牧場リース事業 離農農家の施設の有効活用および新規就農支援策として、JAによる牧場リース事業を実施しています。 JAが離農農家の牛舎や牛などを取得して、5 年後に引渡すことを前提に新規就農者へリースを行い、スムーズな継承と地域の生乳生産維持を目指します。 3. 経営規模拡大支援事業 既往農家への規模拡大支援策として、次の事業を実施しています。 ・施設投資への助成 I 本牛舎を新築し、収容頭数が概ね 10 頭以上増加する場合、1 戸あたり 5 年間 10 百万円(収容頭数 1 頭につき 50 千円)を上限に助成する。 ・施設投資への助成 II 本牛舎の増改築、乾乳舎・育成舎等の新築・増改築を行い、概ね 10 頭以上の増頭を行う場合、5 年間 1 戸 2 百万円(事業費の 50%)を上限に助成する。 ・乳量増産への助成 年間生産乳量が過去 3 年間で最も多い年度の乳量を上回った場合、1 百万円(増産した乳量 1 kg 当り 6 円)を上限に助成する。

	<p>4. 大型協業法人の設立</p> <p>後継者不足等の課題に対応し地域の生産を維持・拡大していくため、畜産クラスター事業を活用して雄武町内で最大となる協業法人を新設しました。</p> <p>地域の生産基盤強化に繋がる当事業は、行政および J A が積極的に支援を行っています(町から 3 年間で総額 20 百万円の助成および固定資産税の 5 年間免除、法人設立に際し J A が 20 百万円の助成)。</p>
<p>3 成果 (効果)</p>	<p>平成 27 年度の当 J A の出荷乳量は、3 年ぶりに増加に転じました。</p> <p>＜当 J A の出荷乳量の推移＞</p> <p>平成 25 年度 89,151 t</p> <p>平成 26 年度 86,612 t (前年比▲2,539 t)</p> <p>平成 27 年度 87,249 t (前年比+ 637 t)</p> <p>個別の取組成果は次の通りです。</p> <p>1. 農業体験実習生受入制度</p> <p>(1)平成 20 年から現在までに 94 名を受け入れ、およそ 3 分の 2 が道外出身者となっており、宿泊施設は常に満室状態が続いています(満室の場合は町内の公営住宅等を用意)。</p> <p>(2)実習生は受入終了後、町内で就職し、地域の労働力確保の一翼を担っています。</p> <p>(3)女性専用宿泊施設では平成 14 年から現在までに 70 名を受け入れ(うち道外出身者 67 名)、終了後に道内就職者は 3 名(現在退職者も含む)、農家後継者と結婚者は 3 名です。</p> <p>2. 牧場リース事業</p> <p>(1)平成 28 年 5 月に当事業を活用して初の新規就農者が誕生しました。J A が離農予定地での就農を斡旋し、同牧場で研修を積んだ後、J A から施設・乳牛・住宅の当事業によるリースを受けて新規就農を果たしました。</p> <p>(2)経営規模拡大支援事業</p> <p>(3)多くの組合員に活用頂き、平成 27 年度は当事業助成金を含む営農奨励費支出が前年度対比で 31 百万円増加しました。</p> <p>4. 大型協業法人の設立</p> <p>(1)融資に当たっては新設法人で担保が不足する事を踏まえ、J A ・法人・日本政策金融公庫で協議を行い、日本政策金融公庫の事業性評価融資(実質無担保無保証)を活用しました(融資額：790 百万円)。</p>
<p>4 今後の予定(課題)</p>	<p>1. 宿泊研修施設について</p> <p>満室状態が続いており部屋も単身用のみであることから、新たに世帯用の施設を建設しており、受入体制の更なる充実を図ります。実習生だけでなく、酪農家の従業員も入居できるように増設しており、地域の労働力確保を図ります。</p> <p>2. 放牧型研修牧場の新設構想</p> <p>今後、より一層の担い手確保に努めていくため、就農希望者を集めた放牧型研修牧場を計画しており、研修終了後は各自の意向に沿った就職(新規就農、酪農ヘルパー、コントラクターオペレーター等)の支援を計画しています。</p>